街の再生「等身大」で

国際競争による産業構造転換は先進各国にとって避けられない宿命といえる。日本でも転換が遅れた地方都市の疲弊が著しい。過疎地では存続が危ぶまれる集落も目立つ。多くの都市で郊外開発が進み中心市街地の空洞化が止まらない。日本が抱える課題を考える一助として、欧米の事例を探った。（1面参照）

都市と地方

米ポートラン ド「歩行者目線」で市街地復活

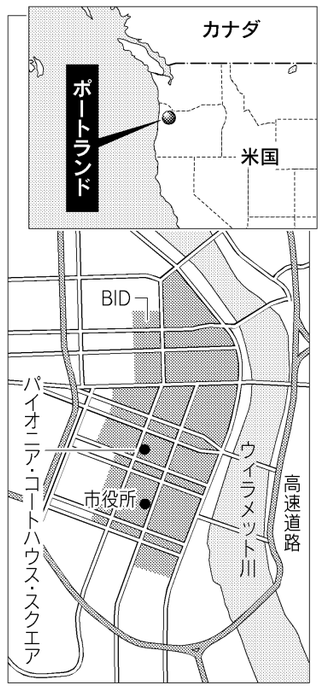
市街地を無料で走る路面電車「マックス」は、市街地活性化のシンボルになっている（米オレゴン州ポートランド）

米オレゴン州ポートランド。ウィラメット川のほとりに広がる市街地は、オフィスや飲食店、高級ブランド店が軒を並べる。その間を徒歩や路面電車で行き交う市民。昼時や夕方には、野外劇場のような形をしたパイオニア・コートハウス・スクエア広場が観光客やビジネスマンらでにぎわいをみせる。

人口六十万人の同市は一九六〇年代まで、市街地が荒廃し犯罪が深刻化していた。高速道路網の整備や「全米最大」とうたった巨大ショッピングセンターの郊外出店などで、住民が市街地から流出したためだ。

行政機能や職場の多くは市街地にとどまったため、市民は安心して歩けるまちづくりを要求。そこで市は、土地の接収や地権者への改築資金援助などを通じた再開発で、市街地の活性化に乗り出した。

目指したのは歩行者優先のまちづくり。自動車が乗り入れできない歩行者専用の商店街をつくり、さらに路面電車「マックス」を走らせた。市街地なら無料。昇降口が低く、乗り降りが非常に楽。運行間隔も停車間隔も短いため、ちょっとした移動にも便利だ。朝夕には郊外に住む市民の通勤の足になる。



通りには街路樹を植え、芝生の公園も整備した。毎週、近郊の農家がファーマーズマーケットを開くなど、市民の憩いの場になっている。中心部には高層ビルがほとんどなく、開放感を味わうことができる。

市街地が活気を取り戻すとともに有名ブランド店、高級ホテル、デパートが相次ぎ進出した。

成功したカギは「公共のためにはある程度の私権制限も必要」との住民の暗黙の合意。市は貧困街だった市街地南端について「活性化には用地接収しかない」と判断した。

BIDを運営するのは商工会議所にあたる「ポートランド・ビジネス・アライアンス」。BID担当のマイク・カイケンドール氏は「犯罪やホームレスの数が激減した」と成果を語る。

BIDの設立で運命共同体的な意識が強まり、「緊急問題」への対応も可能になった。例えば有名スポーツ店の移転話が持ち上がったとき、地権者らが協力して市街地にとどまるよう説得した。いまやBIDは全米の自治体に広がっている。

一部の地主は抵抗したが、最終的には三百以上の世帯、三百弱の企業が移転に同意した。市は四百以上の建物を取り壊し、跡地に人口増を狙って高層マンションを建て、商業施設、公園をつくった。

地元企業の取り組みも見逃せない。八八年、米国の都市で二番目という「ビジネス・インプルーブメント・ディストリクト（BID）」を設立、企業主導の活性化を始めた。

BIDは一定の区域を設け、域内の地権者から料金を徴収する制度。資金は清掃や警備、観光案内、イベントなどに使われる。ポートランドの場合は中心部の南北二・五キロ、東西一キロがBID区域。現在五百七十五の地権者がおり、今年の総徴収額は四百五十万ドル（約四億八千万円）になる。

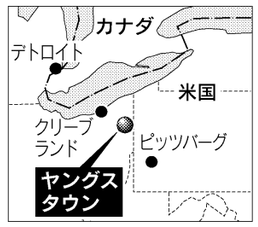
（ロサンゼルス＝猪瀬聖）

米ヤングスタウン「創造的縮小」で産業衰退に挑む

廃屋を取り壊した現場を視察する市職員（米オハイオ州ヤングスタウン）

米オハイオ州ヤングスタウン。若さを連想させる名前とは裏腹に、「衰退」の代名詞として語られる。人口は約八万人。かつては製鉄の町として栄えたが、国際競争に敗れピークの半数以下に低迷。二〇三〇年には五万四千人に減るとの推計もある。そんな都市で等身大の未来を切り開こうとする試みが始まった。

古ぼけた簡素な一戸建てが並ぶ南部の住宅街。戦後、労働者の家族でにぎわった通りには廃屋が目立つ。窓ガラスが割れ雑草がポーチを覆う。だが荒涼とした街角に最近、変化が起きている。



「□□は緑地にします。将来は西側の公園とつなげたいですね」。二棟の廃屋が取り壊された現場で、同市の都市計画担当主任、アンソニー・コバク氏が熱っぽく語った。

景観を害し、犯罪の温床にもなる廃屋の取り壊しは、同市が掲げる都市割減計画「ヤングスタウン二〇一〇」の柱の一つだ。キーワードは「創造的縮小（creative shrinkage）」。一九五〇年代以降人口が減り続ける現実を受け入れ、恵まれた水辺や緑などを生かして、現在の八万人規模を維持しようという狙いだ。

「開発をあきらめるのか」との反発もあった。しかし計画作りのボランティアを募り、住民集会を何度も開くなどして、粘り強く合意づくりを進めた。ジェイ・ウィリアムズ市長は「市民は縮小という現実から目をそらしてきた。前進するには現実を直視しなければならない」と強調する。

〇五年にまとめた計画の青写真では十万人超を想定していた都市計画を軌道修正。住宅区画は三割減、商業区画も一六％減らす。産業区画は重工業から軽工業への転換を図り、大学や病院など公的施設向けの区画を倍増させる。

基本的には中心部に集約するイメージだが、「住民に転居を強制しない」（市長）方針なので、まばらに住宅が残る区画も増えてくる。ただ、こうした区画の住民には住宅修理にあてる補助金を支給しない。最終的には緑地が増える見込みだ。

市の条例では、廃屋など周囲の迷惑となる家屋は持ち主が修理しなければならず、持ち主がしなければ市が取り壊すことができる。ウィリアムズ市長は予算を重点投入し、取り壊しを本格化させた。

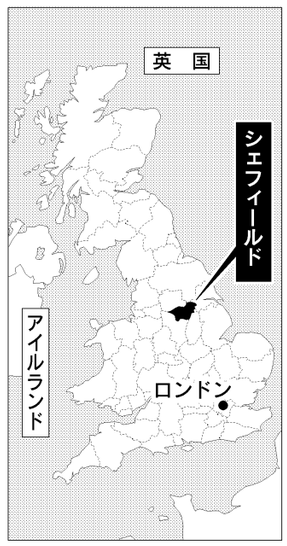
過去二年間で、古い校舎や工場、廃屋など約千棟を取り壊し、緑地に転換した。区画から建物がなくなれば、ガスや水道などインフラ維持費用の削減につながる。

ヤングスタウンのある五大湖南側は、製鉄や自動車といった製造業の空洞化に悩む「ラスト（さび）ベルト」と呼ばれる。縮小均衡の試みを「自暴自棄」と冷笑する向きもあるが、同じ悩みを抱える多くの都市から問い合わせが寄せられる。

計画達成時期についてウィリアムズ市長は「一〇年は一つの目安。住民との合意づくりに力を入れ、二〇年を見据えている」と語る。拡大一辺倒のフロンティア精神に逆行するような挑戦が全米の注目を集めている。

（ニューヨーク＝中前博之）

英シェフィールド「刃物の町」から教育都市に

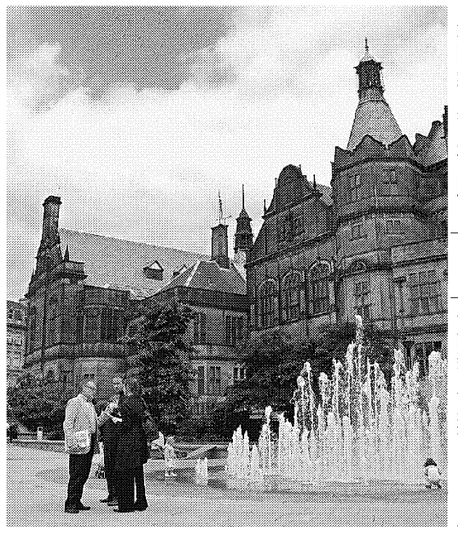


工場の仕事を失った中年男たちが男性ストリップの舞台に立ち、文字通り裸になって再起を目指す。一九九七年、英シェフィールドを舞台として制作された「フルモンティ」はそんな映画だ。

日本の関、ゾーリンゲンと並ぶ「刃物の3S」。かつて製造業で栄えたが、国際競争の波にさらされ九〇年代初めまでに深刻な構造不況に陥った。「映画が作られた九〇年代後半はシェフィールドのボトムだった」とピーター・ムーア市会議員は振り返る。

九九年、労働組合、商店主、政治家らが市庁舎に集まり、まちづくりについて話し合った。出された結論は「人々に訪れてもらえる魅力的な街にすること」（ムーア氏）。殺風景な駅前を地元デザイナーに依頼し、目を引く観光スポットにつくり替えた。

再開発で生まれた駅から市中心部までの道は「ゴールド・ルート」と呼ぶ、水や緑にあふれる街のシンボル。噴水のある広場は市民や観光客の憩いの場だ。あちこちにあったレンガ造りの工場は、外観をそのままにして改装。高級ブランド店やホテル、アパートなどによみがえった。


ゴールド・ルートにある噴水広場（シェフィールド）

金融機関などサービス業の誘致に力を入れると同時に郊外にあった大学を中心部に移設した。「教育都市」のイメージを前面に出し若者に住んでもらえる街を目指した。

英国でも珍しい自治体運営の録音スタジオもある。英人気ロックグループ、アークティック・モンキーズのメンバーが住むなど「アーティストの街」として定着した。

七四年に五十七万人だったシェフィールドの人口は二〇〇二年には五十一万人まで減少したが、最近は学生や外国人の移住で増勢に転じ二九年までに五十六万人に達する見込み。学生人口の割合は八％で中国、インドなどからの留学生も多い。白人労働者ばかりだった街は国際色が豊かになった。

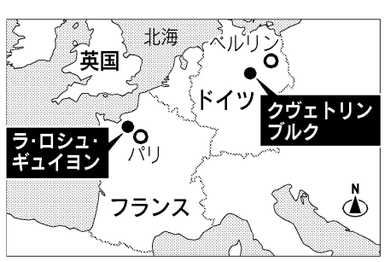
シェフィールドの域内総生産は九八年からの五年で二七％伸びた。その成功に学ぼうと最近は米フィラデルフィアや豪州メルボルンなど各国の都市関係者が頻繁に視察に訪れるという。

サイモン・オグデン市開発部長は「シェフィールドはロンドンなどの大都市を目指したのではない」と強調。「ベストシティーではなく特色豊かなベストリトルシティーになりたい」という。

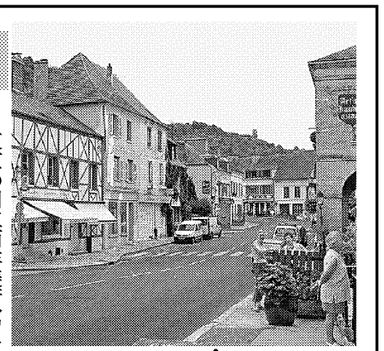
（ロンドン＝岐部秀光）

独クヴェトリンブルク

街並みを保存するための負担は大きい（クヴェトリンブルク）



仏ラ・ロシュ・ギュイヨン


住民が伝統ある村を支えている（ラ・ロシュ・ギュイヨン）

東京の国立西洋美術館には一八八〇年にモネが描いたフランスの田舎町の風景画「ラ・ロシュ＝ギュイヨンの道」がある。その絵の写真を見て、ラ・ロシュ・ギュイヨン村のクリスティーヌ・フォルジュ村長は目を細めた。「村の風景はほとんど変わっていないわ」

セーヌ川下流の谷底のような狭い土地に石造りの家並みがひしめく。人口五百二十人。それも当時からほとんど変化していない。特産品はなく、村は発展もせず衰退もせず静かに時を刻んでいる。都市の便利さを求めず、農業を中心にした伝統的な暮らしを守る国民意識を映している。人口構成は大都市と同じだ。

村の年間予算は約百万ユーロ（約一億六千万円）にすぎない。集落がコンパクトでインフラ費用がかからない。人件費も少ない。職員は村長を含めて五人だけ。村長は兼業で役場では週に二十五時間働き報酬はわずか千ユーロ（約十六万円）だ。

街道の花壇は村民が自発的に手入れする。定期的な広場の清掃は声を掛け合って住民が参加する。「村を自分たちで支えようという村民の活動が財政支出を抑えている」とフォルジュ村長。

財政収入の七割が自主財源。日本の市町村にあたる仏の自治体「コミューン」のうち七割は人口が七百人に満たないが、自治が徹底している。

ドイツの首都ベルリンから列車で西へ三時間。霧に包まれれば怪現象が見えることで知られるブロッケン山のすそ野に時計の針を止めたような小さな町がある。一九九四年に世界遺産に登録されたクヴェトリンブルク。旧市街に足を踏み入れると木組みの家が連なり、夜露にぬれた石畳が光る。

十五世紀には商業都市で繁栄を極めたが、冷戦時代に東独にあったまちは寂れ、街並みは荒れ果てた。転機は東西ドイツの統一。連邦政府などが総額で一億ユーロ（約百六十億円）を投資。街並みを復旧し住民は自宅を修復した。世界遺産になって観光客が急増したが、それでも「補助金がないと自治体運営が成り立たない」（エーバーハード・ブレヒト市長）。

独では社会の連帯感を重視し、所得の再配分が地方を支える。ただし道路建設のような開発事業でなく、景観の保全や低所得者への生活保障に重点を置く。それでも富裕な都市部からは不満も漏れる。欧州でも地方活性化に向けた議論は盛んだが解は見つからない。

（パリ＝古谷茂久、ベルリン＝赤川省吾）

伝統の景観・暮らし 守り続ける

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。